遺 3
969
3

遠門13
969
巻3

繪本金花談巻之三

目録

友衡因淑川ふて雛ヨ逢ひ事
浮世淀手八町堀ふ友衡ヲ還ス待伏ル図
其二
其三
伽羅の下駄乃図
夏齋ヲ妻夫ス罵図

以萬金約換傾城傑事

三浦屋廓中の定法よ奏圖

花魁等高圍ゟ廊外出ると送り送る

松ヶ崎の別業へ帰紱の圖

友衡怒て高圍ゟ海中へ捉斬の図

真柄新平諫言賜死事

同

同

繪本金花談巻之三

友衡固瀬川を羅ふ事

一河の流を汲一樹の蔭を雨宿りとは世多生の因縁ありと。佛經に説給へる人倫同宗の交りを結ぶ事前の生の約やうこそ。さるにても彼此の善惡の差別あり。大藤内藤原の業張の人友衡ばかりなる道去の紅糸よりもゆるぎなく堅く妙なる容姿を迷ひ成ぬるまで掌中の珠璧のごとく愛ぐんと此間より張紙新吉屋を命下し此の仇執持せるかゞ通ひ路を絶ぜ三月廿六日御のごとく三角の花塚をかゞむ

さて孔雀一て仇敵の朝を忘れ秋の夜の長物語こ繼門

浪都ごとくひろみよりて軒をならべ人ぞその数を数へ

春霖物の進くに近侍るみく稽の掲股し義海雷槌女人とも稽

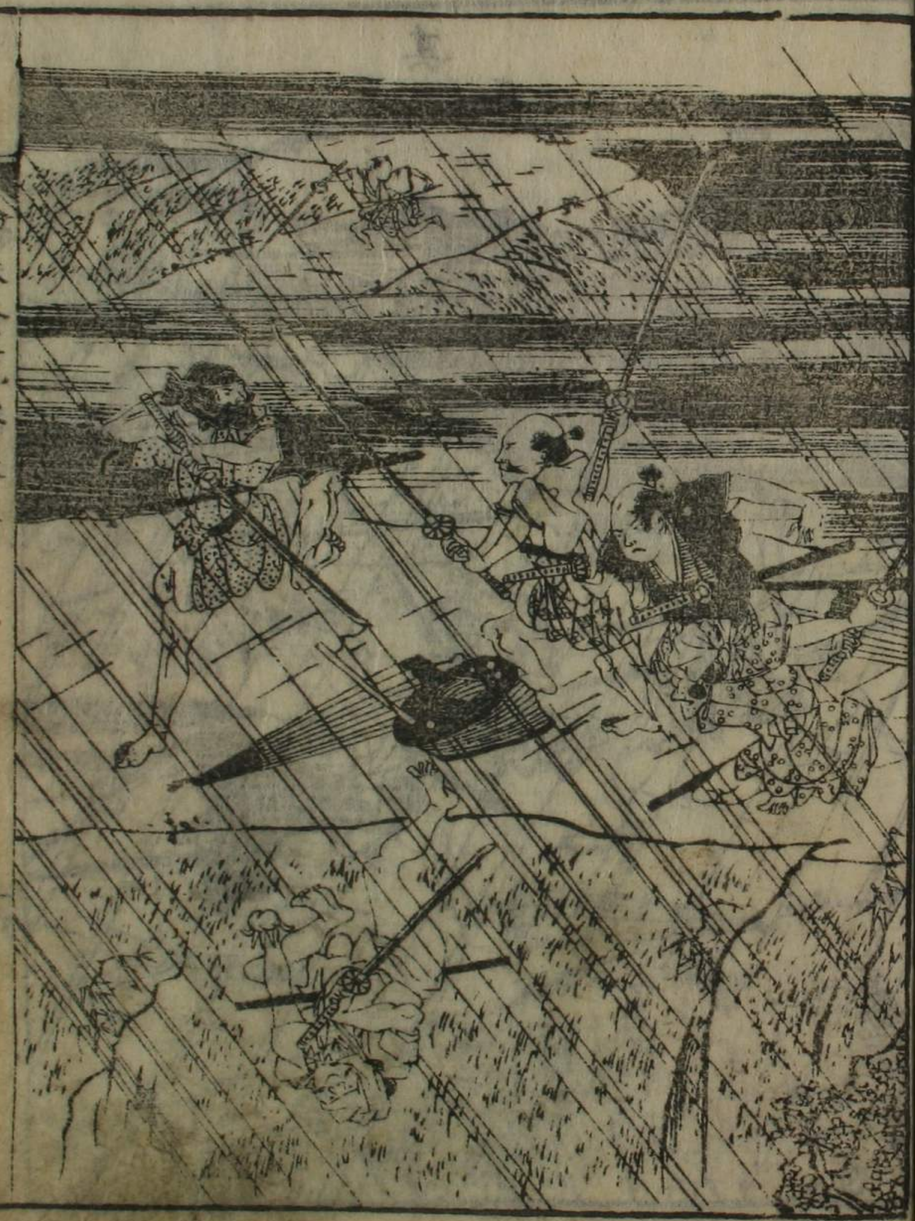
浮世波平
八町堵小
友衡ら縛る所
待伏る男

のらとりくみ引そひ暴風湯をたのぶるに灯燈もとぶ消んとす
こゝろ消〳〵と僅に往者十三人固淋川の八丁堀にさしかゝる命の方
まで人の大漢両刀後下に接近るも傘を風雨に奪はれ手ぶと驚き
掲に草鞋くゝ忽ち半途に出来ぬ〳〵ころ〳〵もとゝ浮世渡平
身を嵯ぬ〳〵事に物をとり遠ひ通りとねに深江氏見かゝ軽き
歌面のより蹶倒こゝ左右の近辺一斉に起ぬ何ぞ
狼籍千方とその紛のつぶ〳〵耳ら〳〵ぶ〳〵渡平結の拵鳴と揉んで女
〳〵童〳〵ぶ〳〵狼籍〳〵ふ〳〵已に傘ぶ拵の程楽に吹飛
脚歩穏みらぶ〳〵蹶上の泥水某の乱れかゝるのぶ〳〵ぶ〳〵
咈〳〵ぶ〳〵何なる乱暴ぞ即今解氏聞〳〵て呉んぶ〳〵ぶ〳〵
〳〵疾く事なるの道中を照源一件ぶ〳〵や〳〵ぶ〳〵集ぶ兇悪

物ひさぶ〳〵常体の者ぶあるべし渡新張川一同ぶ力を接〳〵ぶ
渡平〳〵左右より切て〳〵る渡平ぶ〳〵
信をあげく叫ぶ〳〵ぶ〳〵何者ぞ知ぶ何ぞ面ぶ〳〵
の兇漢ぶ四方より群り来り力の強ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ接戦〳〵
を助て切〳〵ぶ〳〵近ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵
ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵
ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵
ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵
ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵
ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵

ると何時も從星へおのひきおよきさるぞべかくまゝに護送しける寅よ
忠臣と云つべし然るに七首もそろ〳〵後になりておくれて馳来り
この騒動を見るよりもさてこそ一大事でござるまじと宙を飛んで護送し
かけ入と等しく波平が頭上より準之の人に切付まいやさしも大勢の
癡漢面門に血煙たち泥濘の中に倒まろびて悩乱の体をみえし力
を得遁居おの〳〵先を追し悪黨等は切まくられど元来悪流
身にかゝらざる他人の尻持などに波平が働きてみるよりも蜘蛛の子
をちらすがごとく四方へぞ迯と逃散て行衛も知らずなりける。友衛
も最前よりの無事物にかまひ悪党等ちの付るゝ切棄んと思ひ
けれども共八せしに銅が駆りもせしきがよそ曲者ども迯去てのちに
近くよく友衛の無事のを歓び喜ひあひにして死傷のものなきを見て

友衛も悦喜まし〳〵且今泉が危急のところへ来りたまひし所
称美し汝が忠節の志こそ此の無法の難をも絶させし一刻も
早く帰るべしと波平が尻にとゞめをさして世話ありかれど道傳
おの〳〵道をいそぐ掛をそなへ時刻を移さず又五更へ帰りく
随分みかけらぬもの人とがめるともなきべし何もして帰る暇
め居給へども身上の泥をも洗ひおとし帰るべしと是より坊巻に
かゝる人家の門は何か何ひ人の起たる所あらじとおもひなく彼方此方と
見廻してまた雲右衛門口細目に開たる家を見付たりこれこそ
乗ふところぞと迯て無事物の表に止め戸をあけて裏に入此家
まで豆腐屋にて渠生活に精を出し何時も五更前より起出て豆
を磨ひ今日も例の時刻より起出て釜の下へ薪をさし焚。



真二

真
三

湯は沸しありて豆は撰く居ところに雲右衛門階嚊して近ころ
弥忽ちかうかいてずろう湯の不望なりしとふに亭主おどろき
さし寄はくるまでいかりくしき無分物を下し近従あわてとおがりし兇
人十二三人身上泥塗れと成るものもあり或は血に濁るゝもあり。
何是れ尋常の人物にもあらべてざるそろ緒病がら花境がらんひの
さて都下の草職に出會ありて視緒でてろうよく湯を汲みて飲むと
音に通は勝るべしと往昔もいまも金銀に乏り目に瞳るき人情女
房もく未起もおうぎて小児に添乳して居たるが忽ち醒して大釜の中
に珠は多しくる湯は盃に汲とりて友郷をとこにあげ近従等が
穢をは禦ひおとさせたまでは湯をも新に女房輪遣ふ乃木知しりて
東方向にありし彼は疾と妻は物は湯上させ亭主住ぶの世話

名もなくぞ是荒海雷槌よき様に挨拶せよといひ捨て年子物おとの
ゆいかでゆく出て行お人の相撲より今晩の發勤は懐中の調發は
まひ金銀の貯へあるらしく雲右衛門が手に持たる駒下駄を亭主
が手へ迎ごろしより千万の恩を遣べしと一散に走りゆく豆腐屋が妻頬を
吹るもして是を聖ろう汝らいかにも捐どりのある様に五文四文の起上り毎
日稼ぎは是は勤がされ常に此事をいで能く起るにて宗家のてぞ祓家となし
是が何の福ある富貴を神に祈りはせし一釜の湯は遣り再び還らね
大損にて汝ら世間鍛冶にて起て女房見てまかる快よく体もしやし嘯くと詞辞
ちらされ是豆腐屋一云の善語も出でさも早朝し身のあやまり昆腐は操て
そ飛くらる新で出ぬく後亭主や風に変へと下話はまもるとはじまり本のとよいの子
の物ともなくて近隣の人みてせりちとの中に一人のなくて見世羅なり。

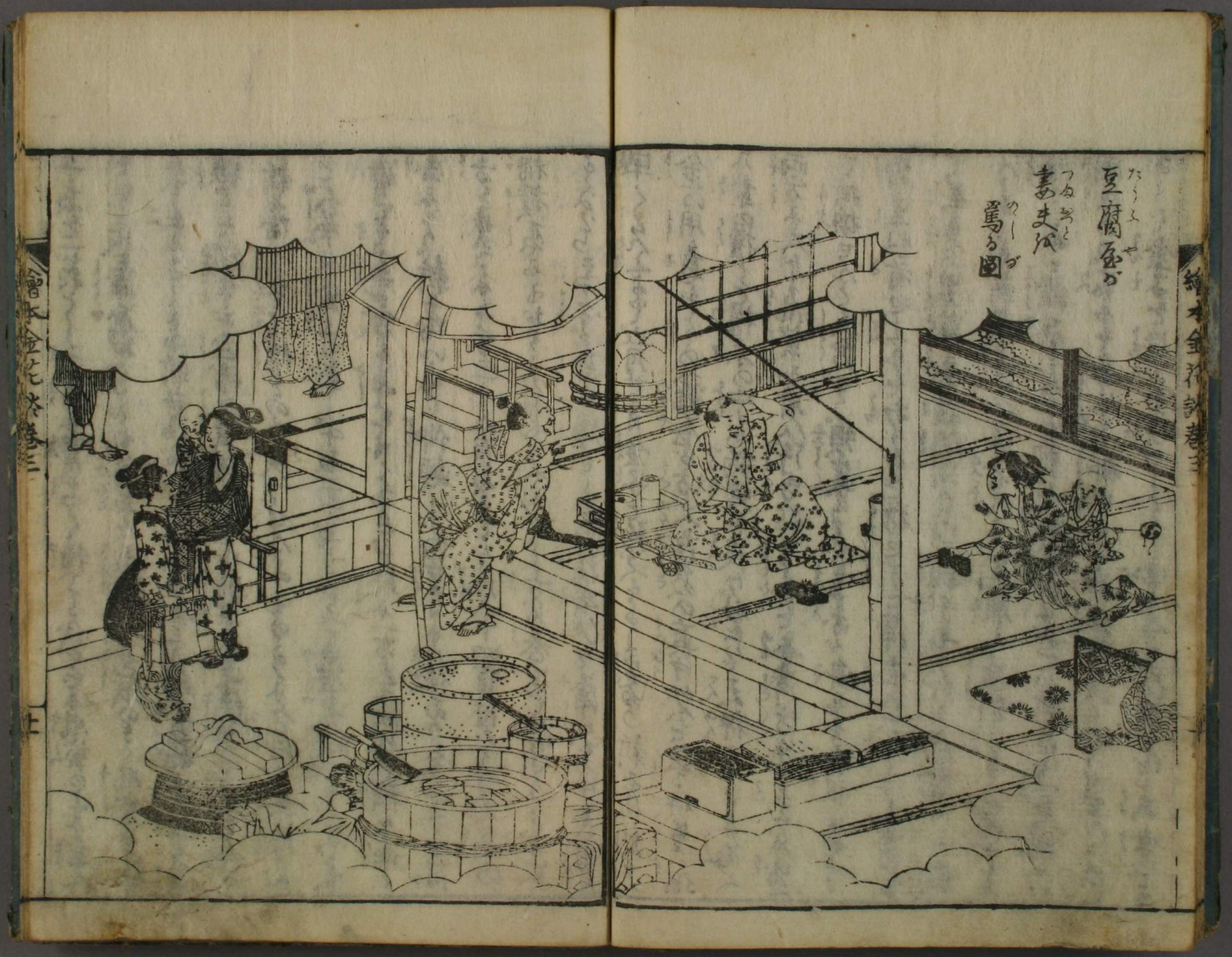
伽羅下駄の図

如も上品の本にて賣みとる時々義軒の金く繕隣家にるく手とあ
伽羅を汲木屢とそこハみ〳〵くのくのとぐさ取かあらぐで拭を洗やと
世上一統の風俗ハ陸奥守友衡の花嫁ハ通ひ〳〵〳〵きくぐ足
定咲くなるべしとそころ都會一面の風俗とも成みなる。

万金釣撰傾城事

新て友衡淀平ぐ路口の狼藉ありて後自然このと後とても旅宴へ
往来しあ文どいるあら変発んあるとうぐ〳〵。るる多を價典金
そころハ松ぐ峠の別業みさ一亜ぐと後川淀郡ぐ新ひみよう左
して金子ハ銅達し新兵衛ハ三浦屋へ中ハ見世ろけ如そハ
変りくまぐ三浦屋中ハらそ拵らぐ〳〵ろ多ぐ身の宣さ中〳〵金子
釣撰みて中さるる屋〳〵とりハみ新兵衛ハもくくハ任せん一身も

早くろんと上ハ中ハ五月廿三日金子と約ぐもるし定有り新兵衛他戸
金の用意をとくの鶴屋ぐ方。大文字屋の直中ハ人を数ら秤量ハ伝
ハ業の權として權本の中ハ釣緒を設け。ぐ方ハ王秤のごくハ指へ
両方みたる風袋を用ひ中方ハ多ハ多を毒中方ハ毒ハ盗
て撰撰せんと支度せう。須臾ろくくそる多ぐ身ハそ衣服ハ
弥宣ハ菊也上ハ中ハおくりを振せ。蒲團又ハ毒しぐ上ハのせ
て屋毒の男蒲團の四隅ハりて挑牛ろう拵くく風袋の上(載
んとそそ新兵衛んていハ者ハ其その衣服を拵別ひそ蒲ぐそ
除ぐ中ハ三浦屋中ハらそ。ハそそ廓中の法ハそひ新兵衛ハて國ハ
國法あり。家ハそ家法ハ廓中ハそ廓法あり法とあるぐぜひ法
さ〳〵ぐ金子を序方ハ授べ〳〵とさ。〳〵ハ者ハそるぐひ新兵衛ぐ為ハ堂ぐ


豆腐屋が
書き出し
寫る圖
繪本金花談巻三

千ちを一束とし、積かさねて風袋のごとくなん
とせり。三浦屋はじめ、金紙を取除き、白紙のまま風袋の色
にて、まみさしたる新吾屋も、忙しくて、ある者、蒲団を敷、金ひきて真
綿にて仲事で、三浦に成振て、是も廓中の定法なりとて、今の
新吾屋もそれに倣ひ、あらぐ、せんてものみ白紙も取除き
とて、第一に金をもて、千ちを二千ちとうでて風袋に接上げ、
皆てある者、方々へ、既に一万三千両にて、稍平均と
成りぬ。新吾いもく仰顛一人の寵を大体あり、今金ひき肩
方を寵をみ、年方三十五百ちあまりて、凡八十四貫目ばかり、大兵の
相撲取なりとて、ものべしくと、手紙巻にて、居ながらにて、是
をみなもつて、ひ、ぐ身に纏せ、ものを後振、或ひは蒲団の中に悪く
金子を縫入その重目成べきる者ありさて、鈎換とるなりて、そは日々廓中
物揭その余る者、みな親しき花屋、遊土産みどこ、弗奥なりくに、
なく、夜ハ入々をぐ友衆、霄のなぐさみ、鶴屋ぐ方に入り、廓中の名妓
嫖娼をこやしくに、酒妓問を、稍、今晩、ある者を連て、松ぶ崎ハ還
年ごろの懐抱を解べき、夜、端くさらぐ、ゆるべ、と、比々中、暮年、ハ、船に
棹さし、暑成、三、五、ハ、ちんあ、固瀬川の、流れ、ハ、臨んで、三岐ハ、ものこ、ろ
ものこ、船ハ、右、左、べ、とる、糸、手、成、携、花廓の、図、成、出、ぐ、旅君、名妓
水色、ぐ、で、送る、出、ぐ、ものを、し、て、ゆ、ゆ、る、友衆、船、ハ、無、稍、ものべ、船、邸
ぐ、岸、ぐ、成、遠、遠、る、水、る、と、も、樓、船、の、中、ハ、て、燈、燭、昼、の、ごと、く、輝、き、て、面
盤、狼、籍、し、て、弥、者、名、菓、座、中、ハ、充、酒、盃、順、ハ、必、り、洋、ハ、こ、ぐ、し、て
酒、興、ハ、乃、び、る、ぐ、る、者、て、宵、の、ひ、ど、ち、ち、ハ、ハ、敦、べ、ち、こ、ち、く、船、中、の、酒

妻みも僅み面伏そうぐうみて。些一の涙も天ぐ。唯有縁う方拾
の幸のこゝはそひ姫こ乳そうあう友御うる者みの人。去年とう人
障。ひきうぬぐみ孔を与し。扨毎みを子ふと人ども法ぐ心中一点の情う
き事を歎き。今身ふ人と連ゆる上うう八我家の光
妻いうみ孔を落付うる。そう旁法をうくと流し。賜しきうう花
堂き大国の君こゝてち仏紙費され。深孔れいりくこ紙世形うう。
木器みあうぐれぐ。ねどぢうる恩をうとれうべき妻を育ひぶ
君みおねぐひ上うう孔幸侍孔どる。流石みれ仏孔ようう育ふを
ぐ紙用てそひへぐる。今を十さぐ。ゆひぐきうみ移ぐ中上生ひうちる
ありこいとくぐらひうる気ちこうぐ孔かうこ。賞の髪の回みちう
雑みこうる。法又三珠眼鹿みを落ううる旅の身ひ人絵品

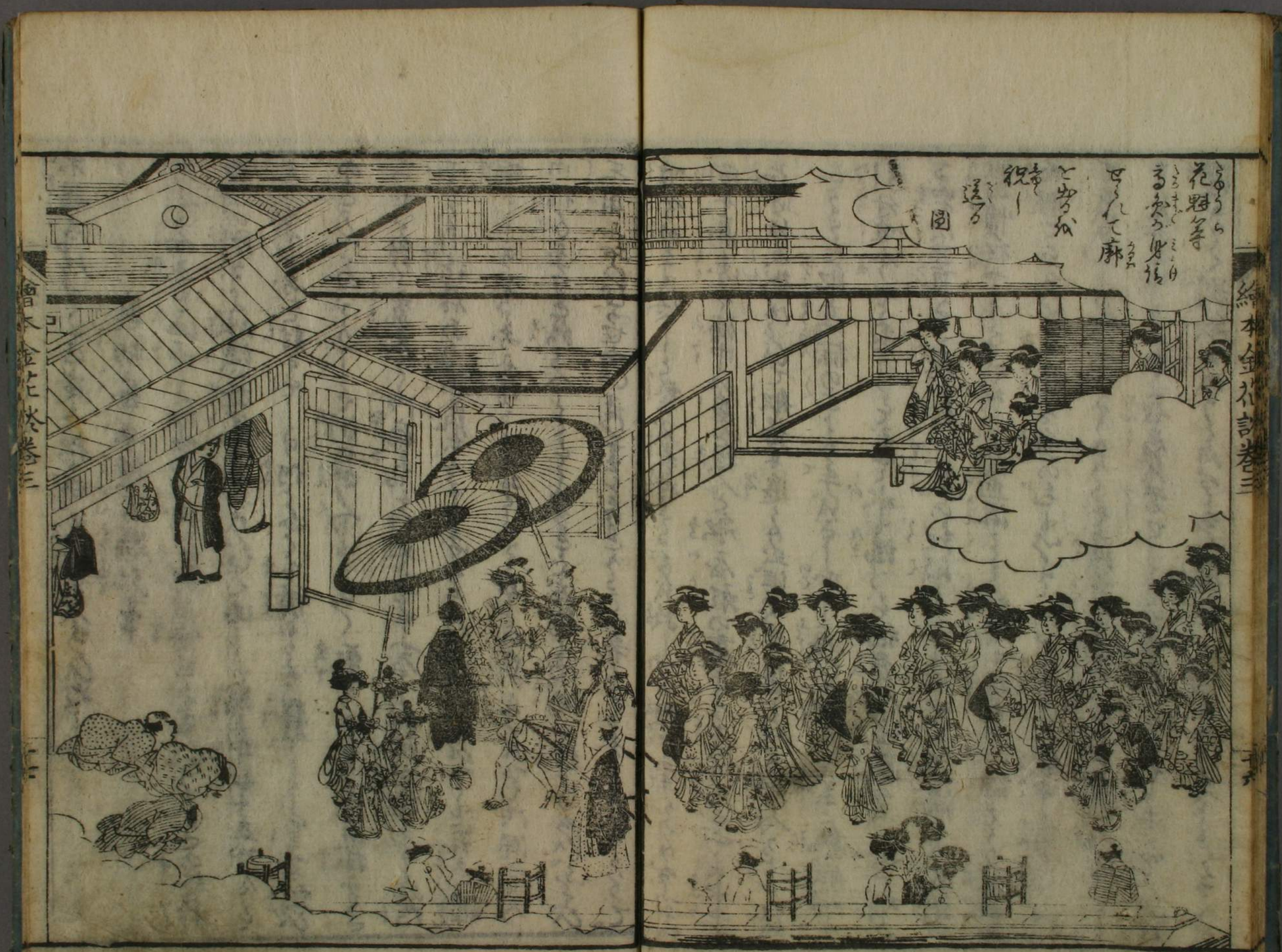
うう優法塞の君の琵琶を脱こうぐゆくあう友御聞新
とうぐ孔こうう。扨をうる名中打ようう。
今孔ぐ新ひとを何の就みゆべこそのときう園ち前ちく
ちうとういうちうぐらひうる孔みて邦新ひとゆ今雪この
場ようち眼をゆこ賜うみぐ。ようぐゆ孔廣大の中悲なうべこと
ひうみ。友御満回茅をそくぎうう如く何とゆのうぐ眼を昊ゆ
ぐうう。ぐう奇いみく頭ぐ紙ぐげ。十出こみぐ憤うを蒙うるんうを
くぐめうう拾ぐうるのみぐこゆ上ぐこ上ぐうう孔れ怒孔顔ぐ
十上をうぐ。ぐみをくぐめ君の市通人鬼孔果ひさをうぬぐうる
うう孔ようう。深くゆこうぐうるまあうみ孔みくぬうるきゆ幸みをんぐ。
後の世ぐも人世ぐまみ婦とあうるんと佛神みを祈う拾こ

三浦屋
廓中の
遊法ゑ
つのつゞ
募図
繪本金花語巻三
繪本金花語巻三
5

るの侍しが醜くき妾になんぞよせなひ万金が為に身をなげうちても
くやしからぬ乙女の身にあらずして冥加なきことにひしるすにはへども遊女となる
遊女の活路とや色のおもやるをいひし一言をつゞらになし君の恩
義をあがるそ遊君どもの物こそひとかたつおきさんよする男こそ
何業と云ふかやうにハせしに貌の栄花に操をとろう大国の君にむかまを
しかんとらうくの請をうけんのそおのらん後やその恥とねじ新る
汝もなく出家へさからはる為しといふ身が賤りおそ此座に於て悪
業を離れとし身を空法子の衣に今尼法師の形となりは家の
汝が武運長久の祈をなせて一代このすゝに身を捨果し君に對し
ての汝が恩報しまるやらハせしまの今人系らぞや　離別　その人
ならん人のくえ身を任せねを操とし貞女女婦にへくらとハ流

を立る此は今もちるべき心なれバいへど行きて使をされるなく失く嘆くを
偽りとも汝が恩のほどをなど忘れじと思ひ入る気色に友衛憤りに
絶ず死なんとする右の手をと警めを振りて右の手にて若添の柄に廠
汝が唯今の一言自己の身のうへにて人情を知ざる侍ぞ無人の卜祭く。
傾城も情を高し河竹の身人の志をおもふしを情を無下に背くと
おもはぬ風に靡くも遊女のならひ。みちをぞやまきこそ流石名
ある若にて友衛が富貴にも我か汝を僅に貞操をもつて死んで見せ
ずして眠をり願ひ得て不犯の所をもかりしぞ誠に拙女の鑑世の賢
女と思ふとの名をとらせんとおもふ名利を貴ぶ野婦なるものか汝が
名のわたれど友衛は都へ會一同のうちひのもとたるの那友衛をこよ
拙君のくらしに暮してこ十ヶ年がその間風雨寒暑のさかひなく添ひ

積悪時々大虫の主として下郎と口論しぱちて万金を費へし惰
をも知ぬ拙女を愛出し渠屋となりて所を脱去しを雑まてその
時にいたりし無しなど區々に風聞せらるゝなれど是が恥辱ハ何ばかりぞ
や殊に唯今ころぶ家の武運長久を祈んとて何事そつが家にて
丹誠を抽づる祈祈の寺社数多あり。おのましきの尼法師に武運
を祈らせしや手討となしてその憐をちらさんべしと膝の下に引
敷まんで浅部猿川妍臣ども友衛に向ひ道理至極なりとまへくる
得と言る者どの諫言待るべし何分清子を軽させの人々の者どの清兵
言ゆされんも聊てもなりに至る者とてしなりちら聖主何をも
指清く読言清無用新くされ存分の返りにて成下すべし我手討も一分様し
ものひとよりの巨人惜なりぐ人を死なでも然こた情なまで友衛殺きくように思案
唯今望みて任べしと然者成巻持ちる手成放し刀の鯉口に手をかけるその
間に高義々海中に身を投んと船屋形の裏より走り出る水中へ
飛込成友衛浮びて船縁に追る出渠が半身を川に墜入るところ成
そこらで船高欄の上より手成さし延し再び烏雲を汲来と執て船端に
引付唯今いとなきうそぞ水に墳ると細首一刀に断すへぞ嬋娟き
る容姿女首たちまち鬼と化し一流の紅波としもに水中に没滴ちる友衛を
鬱憤相やをぐらくやおりしかん血淋こる切首を提なりて一時ぐらり水面成
白眼でちらひし其勝る所の毛もよだちて怨しく船中青ざめて居
て新成上るの一人もなりくるその後首成水中に投すておひ嗚乎しし
なりし貴婦なくあまり心の無益なるやく手あらひに
潔ぎよく別船にのりかりてまし酒宴救剋に及ぶと人ども


花魁等
ゑんの賀福
ひらして廓
と出る狐
祝ー
送る
園

不興げにてその夜ハ松が磯の別業へ入らせ給ひぬ

真柄勘平諫言賜死事

友衛高奈を海中より切なびし後ハ先非を悔せらるゝさすがに桂君の情の所さより此後ハ桂里へもおもむく事なく、と既まで仏に立給ひしを、きこしめさるゝ事を封をてしす何となく下情にうとく欝々として又ふ詩ひのきこへ給ふハかりしが例の奸人どもすゝめて聚の中よりえらみて近揃ふるさらせ給ふなバ気をふかく病気を引出させなむと同所三浦がうち海雲とやいふ君あり。諸氣を何事にて乃ぶ所もなくいへども容色の嬋娟たる事ハかる事に勝るもおもむかぬどののみにてひへども酒宴乃れ桐子に女房の緒くへしとてめるまで友衛も閑暇に堪かねたまひ三角におもむかせ給ひ。落雲を召よせらるこの者ても勝とる事なりて。

何とのうちれ意恵にうなつ給ひてなし金銀を貪りさらんと三毒の爪角をこ磨て立給ひぬるに若葉に似せる女夜叉言葉に玉を合せ柳の糸の枝寄に打靡きてる気色にて友衛もおさて感させ給ひ。是よりも落雲が色香に惑ひてる事なかりしハ遠に越しける仕地し無数落雲が方に通ひ給ひぬ御かくも人の相撲取舞海雷摧なぞで是よりも楽才兵が方へ送り宴かやくにしてらひ給ひ給ひて放蕩の途に導すんと桂里に於ても酒宴の興殊しそその夜宴にて奈扇を贈りてごろ渡部新吾等がとめ中に是閃りて諸士にとう立旗禄二百石を下され荒海見て助を孜めく義井和助雷摧雲二郎等が彼ゆく河並三右衛門とぞ云はまるごとき主君の寵愛を鼻にかけ人を蔑のごとくれぞ持なしらがきる人を致て

松ヶ峰の別業偏鉉の図
繪本錦花詩巻三
十八
十九

當家譜代の諸士これを聞て憤りを発し寄て會合し荒海等は元來其出所の正しからざる人にしてたゞ世上に媚へつらふ風来の彼等を諸士の列に加へられしさへあるに席を同ふする時は権威にほこるをなげかはしき事なり一統に願書を奉り自然右の者を退けられずば悉く暇を乞ひ禄を辞して立去べしとみな／＼申合たる中にも抽でゝ出たる者はかの家にて當官の諸士の中に甚其行勤平といふものあり性質は忠直にして少しも非義にくみせざる人なるが友衛酒色のために乱れ専ら浮世渡平を殺害し高氏を手討にせらるゝよしを聞て歎き才不勤翁由て直諫をたてまつれど渡部綾川の悪意放蕩なるをいさむる奸臣のともがらをその儘に信じて早速聞入れなく却て諫言なる時は主君の旨に背くとて其身の構ひを顧みる禄盗なり。

しかるにこの御行状を見るに忍びずして諫をたてまつれども君いよ／＼不忠に似たり。国家のため諫めに死するは士の當前なりと寡出に諫書を認めつき志して見出んとす然れども佞臣ども君の側に眼進めて役にあるを空しく数月を過ぎしが八月朔日は右大将家の御前において嘉祝の式日在鎌倉の大小名ことごとく登城して友衛も登城の装ひ美々しく整へて広敷に出座し勤番その日諸士とて宿直に居たりしが程ちに列中より立出て平伏し左の手に持たる諫書をうや／＼しく出せば友衛立ながらこれを手に謹而奉捧諫書と上書したる文書を手に取てあけ除てとくと上段に着座し押ひらきつゝ讀てその詞に曰

謹而言上之事

友衡怒て
海中へ
抛斬
当家
図

経
殿様　御幼年ゝ御時五夜被拵　御学文其上
御明君ゝ成座ゝ沙ゝ豆蒙ゝ諫言おゝ見入ゝ沙ゝ。御孝行
言上仕来ゝ

一
迎来御側役ゝ輩頻ゝ丸相補　御賛散拵置江　御供仕毎
ゝ御通行ゝ美を尊ゝ丸ゝ沙ゝ紀寄時幕府一統の風説ゝ成ゝ
敬しき御事ゝ仕ゝ成ゝ此義徒先達方上て仕ゝ沙ゝ。御之ゝ沙ゝ成
相おゝ見ゝ拵ゝ成ゝ沙ゝ。逐付　御約束敬ゝ都下ゝ耳周候
素一大製来ゝ丸座ゝ沙ゝ。世後拵置　御通行停止ゝ弘　後出ゝ
古ゝ茅一ゝ沙ゝ成ゝ

一
拵置御供中摩ゝ輩ゝ渡部新右衛門。後川勘負志賀武右

撲山弥三右衛門。渡澤市兵衛。村山芳右衛門。原田市之丞。渡部
輩徒令従　御前拵置御拵裏被　作出ゝ。御諫言ゝ
上ゝ。御置ゝ沙ゝ拵置ゝ。宴ゝ奥ゝ相添偏ゝ輩用ゝ。家ゝ沙ゝ云沢ゝ新
ゝ不忠者ゝ丸ゝ御ゝ成ゝ。都ゝ右新ゝ者被遠近御前ゝ作。当時
の急務ゝ沙ゝ成ゝ巧言令色鮮弐仁と成ゝ
高弟ゝ中傾城ゝ女郎ゝ御機ゝ相叶ゝ。万金ゝ幣ゝ
外石出ゝ。御意ゝ不叶時宜出来仕ゝ。
御手村ゝ成ゝ成ゝ。幕府一統ゝ悪説ゝ。数百年ゝ存ゝ
左端國ゝ風聞ゝ。著ゝ國用ゝ費ゝ仁ゝ道理ゝ相成ゝ
畢竟　御側ゝ成ゝ者ゝ。親類ゝ自不十ゝ右衛
ゝ事相叶ゝ沙ゝ右等ゝ者ゝ。弘ゝ敬ゝ。万金ゝ

所対策御座候

一 岩城兵庫頭様者代家門ゝ貴く厳垂御悍也諫言も亡く

し愚表向一通りの御諫言耳なく柱置御通行しなくも強御

御諫言も無ゝ此事ゝ之御不満之御振也次第不届

新出者者者者ゝ敵ゝ亡久敵ゝ禄直諫ゝも不仕全悪臣の仕

方ゝも不事存ゝ偏に直諫等仕ゝ後難を顧ゝ者ゝ若然

則世ゝ禄職ゝ侍ひ御座ゝ速に才原勘弘敬職ゝ二

十四字ゝ中一ゝ少年ゝ 石出御能ゝ弘ゝ亡ゝ孝ゝ

良業若ひ御ゝ病に成ゝ賢ゝ亡通知仕所ゝ

御者家諸士ゝ者 代ゝ御馬乗ゝ戦功有ゝ者御座ゝ

愚ゝ来風来者蒲海霄艇ゝ人 御意に被ひよ

諸士の列に被召置ゝ因是御譜代ゝ諸士高面目を被ひ存の

者ゝ同列仕ゝ事相歎申ゝ為此度ゝ弘亡ゝ亡ゝ諸士一

統不和ゝ成ゝ自然ゝ変出来ゝ仕ゝ速に彼ゝ人の

中ゝ御聞ゝ亡ゝ事。是又即今ゝ急務に成ゝ

右ゝ外御ゝ御ゝ箇條数多御ゝ所ゝ成ゝ

悪く紙上に載不申ゝ若於御門外明者異に言上可仕御聴届ゝ

下ゝ亡ゝ後如何様ゝ成ゝ愚罪科ゝ也。毛頭御恨ゝ存何ゝ

恐惶謹言

某月某日

真柄勘平

とて亡ゝ ゝ友衡遂一ゝ ゝ畢て動ゝ ゝ汝ゝ ゝその上意謝

事不仕千万ゝ。我家中ゝ諫べきゝ ゝあゝ ゝ諫言べき筋ゝ

の者あり。主税不知ありとて、大国の主若悪みて、一国を手
ゝ事なるべきやそのゝ此練書を其庫頭を難儀し家の者共老る
者共迫よみどり侍若垂人の中条まと波郡後りを巧言令色の者ども
ゝ難訴みゝどもや汝ゞ知ちぐひと笑くゝろ。彼ども知たぐひ
ゝも世よ忠練とあるゝ者ども此くひさゝゆゝ練書ゝ焼てに
ゝべゝゝ兵迫ぞけとその計成立んとしめゝを。如ま上後の
隙ゝ事ゝゝ豆民全く知ちぐひ仕ゝど唯今の陣立中下
ゝゝ上成難ゝ難訴し仰出ゝ逆意仕ゝべて難
言みどゝゝ朝夕君の歩側ゝ閉ゝ阿腰ひゝゝ君ゝ對て
罪ゝ元忠民ゝみど成思ゝ言上仕ゝ成難ゝゝ中ひゝ手の訴ゝ
ところゝ君の所兵前ゝ在ゝ常ゝ練ゝ難ゝべきを練ゝ拵ゝ

所拵ゝゝ阿倭の禄賦を此座ゝ置ゝ此座ゝて其の
罪を新ゝ直言ゝ物ゝ難ゝ民ゝ中条難ゝ思
ゝ成ゝ後川等の阿腰の者ゝ元忠の對決仕ゝ
べゝ民為渠等ゝ輔ゝ桐員一言の中条ゝ兵ゝ三族百合の
断罪を蒙ゝ恨ゝ存ゝ次ゝ所練言ゝべき難ゝの仁
ゝ毛中練言中ゝ中ゝ練ゝ中ゝ不能千万ゝの言
ゝ成ゝ程ゝ知ゝ中ゝ吃ゝ中ゝ練ゝ中ゝ者ゝ練言成を
ゝ中練言中ゝ乃ゝ成ゝ錯ゝ新ゝ
ゝ投ゝ成ゝ藏ゝ知ゝ這極ゝ書上仕ゝ乞成ゝ知ゝ
ゝ物ゝ民ゝ中ゝ所ゝ中ゝ新客中ゝ主ゝ知ゝ成ゝ速ゝ足ゝ難
科成ゝ待ゝ聽ゝ中ゝ主ゝ者ゝ成ゝ此ゝ座ゝ血の痕ゝ

真柄勘平
練兵の図

陰が一身碎肉み成るも死退きじと渡部後川が輩をうてこゆるを
座しうる有ん実忠誅の面業なるべし衛宗て憤り氏義しうる人雅
ある鎗氏持来る近臣なのくあるをそろへ勘平こゆ者氏乃主こゆ
女しも退ぞ。あ〜事も出るべ。弓一丸氏ぐ死ぬ出るうへ何ぞこの死
をもうべき。人めも主ゆて手み手氏ゆ者あ〜ぐ血の涙を流べ〜こと眼を
酌て氏ぐ。衛宗のゆ〜捨うこゆ。ひ〜ぐ。滄氏持きれしうる踏み二三
度叫びうゆひ〜ぐ。猪川勘負滄氏取てうる。鞍をうれ〜下ゆ〜そ
そう除うを。氷雪のぐ〜なるみ滄先を。勘平が胸先み突者うるひ
いるみ汝退平退ぎうる平。たゆみ一言氏り。勘平ゆ寛宗とうるひ。比于
を胸をうるうとうぐ。鞭で止ぐ。紙へ胸中み三百究の風窓を開るうるぐ。
直糠の懍を愛ぐ。ひ西ド。隠ぐ死て情ひみ立ぐ。来ぐ死後ゆ〜ぐ。と

後悔脳を噛ゆうるゆうあ〜友衛西死一言うゆ唯今その言代出さ也
んと鳴尾をてゆ一滄みゆ徹しゆ。滄洋背脊み接朱ひみて死ぐ。こう
勘平女〜身動ゆぐ。死〜ぐ。滄の千浪巻のう氏紙条と抜ゆ。眼氏
いゆ〜ひ。子定月刑ゆらゆて呂国ゆ。ひ范増例ゆて項王死ぐ。鳴子追付恩
石ゆらゆ也ゆ。ひ〜と人唱一聲て死ぬ。ゆ勘平等ゆ。氏ゆ未世みゆ又
あるゆ〜ぐ忠隠ぐ。凡日月の照臨ゆうるゆ同じ〜ぐ。ぐ土地
みゆて氣質の受ゆうるゆ異なるゆあ〜漢土の風〜てゆ最の
約ひ正〜ゆ〜ぐ。練うみ死ゆ。ゆて死ゆ。我日国のう〜ゆ
ゆ〜ゆ〜みあ〜ぐ上古殷の紂王のゆ〜ぐ。其後比于周みゆ。て子定月屈
原。奏漢ゆうゆて唐宋みゆ。ゆ〜ぐ。歴史ゆ載ゆ。殺死の人あぞ
ゆ〜ゆ。皇国ゆ於て。青史ゆ載ゆ。ゆ〜ぐ。ゆ〜ぐ。ゆ〜ぐ。ゆ〜ぐ。

臨く死を軽んじ事の急に迫りて腹を撫て死を右郷に向ひてこゝ
ろの我朝のごとくなる者万国に於てかくなる事なし寛永の間の国風を
慕ふまことに忠勇兼備せるの手もなく殺害せらるゝ事必しひさ
ものたるべきや此きゝ才乗を茂平手討せらるゝとかゝるも一散に付け付
旅て仰顧しるに体まで却まに心みるみる歩縁ありて孔を討を蒙りたる友衛
寄ひたる渠狂礼しるとゝ人て登場の妨をなしるれ手代しるべ乗
ものく法をなるべし乗員を以按ずるに法諫を成ず上をうと是
しるに法を乗数回法諫を上なる共今日却で於室の法通を繋ぎたる。
毎夜涙を流せるに出ることなく家りに此る諫をもつて自然法許容
ものされるを法家に於て腸を搾出し諫死仕るの法に殘分に入へ
ども其法家に於て諫死仕るべき君の法所行正しうざる乱忠臣の者を
て詩死せるとや さて死して乗が名を忠臣と称せらるゝ忠臣成る
し割君のごとく世上の人口に君臣離隔せるを今日まで惜
しむ後一刀を君のこゝろを切りて忠誅の人の志を育る諸人の古頭に
第ひ出蒙るの乗ようの大のるに統をとも君も法明知のこゝろをなる人
を移るく無の法職もこゝろ茂平にをみ左度らをみんと存じ却平
等ごとき忠臣の者に乗ひ出るんけ。もく阿越の小人の内に陸ろ預也
拙ひ陸面の孤臣とゝ是れ事。面目なれ幸に今日ゝ乗ら役義
法先を要るに賞賜を法年間の老臣に任じ本国へ執政乗仕りく移
乗員で今日法級を辞しまゝて言外に諫しるに不忠とて
へぐりき友衛 竹中みたけ〇どもみ才乗ら役を辞しを出へ帰りの孫
名事刀ゝに該石のごとく孔堅親仁が出来りて幸むれるしん

とおぼせーうく怒顔をしめ和げのひぜ不ところを理を会はせう。
今直柄動平ぶ忠言をそそ方ら雖の廻ぜ中ゆ徹しー先聡ゆ悔まこども
ろぐと雖ゆ法ぶ雖死をくきしを子ぶ悪名のそくるんん事ぜゆのひ近ゆで
人はの笑ひを顧くぐら遠ゑのそど世ゆるべーとも笑へどそのゑ代きく
末石の人と人どもを隆ゆ伏せぐる者わらんや人集を屹と慎しべーー惟今
までの通ろ大業ろぐら役業をを勅ゆ中ー恩義をゆゆてゆぐえらゆー
うど方原ろをゆ勢ひ小身ぶ豆財の吉上ゆゆの収下さて陰身ゆ
あり勢ひ入ゆとぜてそを近きく

絵詞左　金花談巻三之終